

|                                                                                  |                 |      |            |
|----------------------------------------------------------------------------------|-----------------|------|------------|
| 表 題                                                                              | 「あとは、やっておきますから」 |      |            |
| 著 者                                                                              | 高見 晴彦           |      |            |
| 作 成 日                                                                            | 2023年2月20日      | 最終更新 | 2023年2月20日 |
| <p>関西学院大学神学部 第57回神学セミナー 現場報告 原稿(事前質疑応答含む)</p> <p>2023年2月20日 関西学院大学西宮上ヶ原キャンパス</p> |                 |      |            |

皆さんこんにちは。私は、ここ関西学院大学と同じ兵庫県西宮市に在ります、プロテスタントの専門葬儀社、株式会社シャロームの高見と申します。本日はお招きくださりありがとうございます。どうぞしばらくお付き合いください。

早速ですが、皆さんは葬儀社のオフィスに入ったことがあるでしょうか。葬儀のために葬儀社の会館に入ったことはあっても、事務所に入ったことがある方はあまりおられないのではないのでしょうか。ですから日頃私たちが社内で過ごしている姿は、なかなか想像できないかもしれませんね。とはいえ、そう特別なことをしているわけではありません。例えば葬儀を請け負っている時には、火葬場の申請書類を整える、生花や霊柩車の手配をする、遺影や会葬礼状を作る、必要な道具を車に積み込むなどします。終わった後には、請求書を作る、戻ってきた道具を整備する、不足している消耗品を発注するなどです。そして葬儀が無い時はというと、新しい商品やサービスを考える、倉庫の整理をする、花壇の植木や草花の世話をする…まあ時には、同業者や取引先の人に来て、麻雀しながら情報交換、などということもあります。

また本日皆さんがこうしてセミナーをなさっているように、私たちも業務に関わる知識や技術を学習するための研修会を社内で行うこともあります。葬儀実務は元より、宗教儀礼、歴史民俗、関係法令、業界の展望や課題、接客や質疑応答、遺体の変化や感染症の知識、ほかにも花の種類や育て方まで、幅広い話題があります。その中で、折に触れて取り上げるひとつのテーマがあります。それは葬儀士、ここでは葬儀を請け負う職業人のことですが、特に教会での葬儀を請け負う葬儀士にとって、最も大切な資質や能力とはなにか、というものです。これは正解を求めるものというより、スタッフ各々が業務に向かう自らの姿勢を見つめ直すための設題ですが、さて、皆さんならばどうお考えでしょうか。

先ほどの学習の内容からすると、実務上の能力、例えば法令や社会制度を熟知して手続を円滑に行えることや、生花を美しく飾ったり、遺体の容貌を整える技術、多数の参列者を的確に誘導できる技術などでしょうか。あるいは、遺族の希望を聞き取り形にする想像力や、取り扱う商品をよく知り、丁寧な説明ができ、遺族の疑問に十分に答えられ、適切な料金で葬儀を請け負えることでしょうか。はたまた、いつ起こるかわからない人の死のために、二四時間三六五日、電話が鳴れば目を覚まし、昼も夜もなく走り回れる体力や気力でしょうか。それとも、信仰に篤く、聖書をよく学び、葬儀の理念や式典の手順をよく理解していること、もっと端的には、そもそもキリスト教徒であったり、キリスト教の専

門葬儀社であることでしょうか。

いずれも大切なことのように思えますが、”最も、第一に”というならばなんでしょう。子どもが幼稚園で貰ってくる感染症にかからない抵抗力？助かりますねえ。家族で約束していたイベントを急な仕事でキャンセルしても、笑って許してくれる優しい妻や子ども？ありがたいですねえ。もう資質でも能力でもありませんね。さておき、私は「遺族、司式者、教会員、参列者そのほか、その葬儀に関わる全ての人たちと、信頼関係を築く力だ」と考えています。

先ほど挙げた実務の知識や技術、気力体力、接客態度などは、なるほど業務を行う上で必要な力ですが、その必要がどこから生じるのかと突き詰めてみれば、それはあくまでも皆さんからの信頼に応えるためであって、知識や技術がいかに優れていてもそれだけでは単なる自己満足に過ぎません。そしてキリスト教徒であること、キリスト教専門葬儀社であることなどは、実のところ、業務を行う能力のように必要であるとさえ言えないものです。確かに、例えば遺族がクリスチャンであるような場合には、初めて出会った時に比較的取っつきやすい、共通の話題が探しやすいという可能性はあります。また「自分の葬儀は同じ信仰を持つ人や、キリスト教に理解のある人に手伝ってほしい」という希望を伺うこともありますから、営業上便利だということは事実です。ただそうだとすると、キリスト教徒でなくとも教会のことをよく知っている人はいくらでもおりますし、どれだけ話が盛り上がりとう実務が十分にできなければどうしようもありません。そして仮に、人物として信頼できない専門葬儀社と信頼できる一般葬儀社、どちらのほうが良いかと問われれば、これは自明のことでしょう。そもそも、この周辺地域などはまだしも、日本全国を見るとキリスト教専門葬儀社がある場所など極僅かなのですから、これが一番の資質だとするならば、日本のキリスト教葬儀の多くは端から満足のいくものではない、ということになってしまいかねません。

とはいえ「信頼」というのも口で言うのは簡単ですが、なにぶん形のないものでもありますから、社内での研修といってもそれは各々の経験から感じたことを話し合い想像を広げていくよりほかありません。その意味では、学習というよりも教会における証のようなものかもしれませんね。本日はそのような話をひとつさせていただきましよう。

さて、かつてある先生がおられました。大きな教会の主任担任教師でしたから、葬儀を

お手伝いさせていただく件数も年に十件を数えることもありましたが、簡単な葬儀などそもそもありませんが、数が多いほどに中にはとりわけ背景や人間関係が複雑だったり、スケジュールが厳しいような案件もありましたし、葬儀が終わったその日の晩にまたお電話をいただき、深夜の病院の前でお互いに身体を労り励まし合ってから院内に入ってくというようなこともありました。

葬儀の時ぐらいにしかお目にかかることのない先生も多いのですが、この先生はそうではありませんでした。ある日私が事務所におりますと、一台の車が駐車場に入ってきます。どこかで見たことのあるような車だな、と思っていると、その先生が他の担任の先生方と一緒に降りてこられました。

「やあ、ちょうど近くで会合があってね。確かこのあたりに事務所があったなと思って、せっかくだからみんなで見学にきたんだよ」

「先生、仰ってくだされば茶菓子でも用意してましたのに。コーヒーぐらいしかなくてすみません」

「大丈夫大丈夫、ぼくコーヒー好きだから」

先生は本当に私の顔を見るためだけにわざわざお寄りくださったようで、他の先生方も展示してある資料や葬儀用具に興味深げにご覧になって帰られました。その後も幾度か足を運んでくださり、また私もその教会の近くを通る折りには、用事が無くても世間話をして邪魔したものです。

そうして交流を重ねるにつれ、私は先生をいわば苦楽を共にした戦友のようにも思っていました。先生がどう思っているかはついに伺ったことはありませんでした。…いえ、残念ながらはや伺うことはできなくなってしまいました。その先生はご病気によって突然に亡くなられてしまったからです。

先生の葬儀の前夜式が終わり参列者が引けた後、我々スタッフも献花をしました。そして翌日に向けたミーティングの中でふと、スタッフのひとりが尋ねました。

「さっき献花の時、先生になんて声をかけたの？」

皆それぞれ、お疲れさまでした、お世話になりました、などと語りかけたようでしたが、私はというと「あとは、やっておきますから」だったな、と答えました。

先生が亡くなられる二週間ほど前のことです。その教会から教会員の葬儀の依頼の電話がかかってきました。いつもはその主任の先生からかかってくるのですが、その日は若い担任の先生からでした。「主任がご自分の身体の検査のために入院していますので、私が代わりに司式をします」とのことでした。日頃から忙しくされているし、たまにはそういうこともあるだろうなぁ、と思いながら電話を切って出動の準備をしていると、すぐに今度は主任の先生ご本人から電話がありました。

「教会から聞いてくれてる？ そうなんだよ、心配かけて悪いね。明日お腹を開いてみる予定になっててね。葬儀は担任の彼にしてもらうんだけど、ほら、これまでぼくの傍で見ても自分でイチからはしてないから、きっといろいろ不安だと思うんだ。助けてあげてくれるかな」

「ええ、もちろんですよ。こちらはちゃんとやっておきますから、ご心配なくご療養なさってください」

「うん、またいろいろとお世話になるけど、よろしくね」

結果的に、これが私と先生との最後の会話になったのです。その時の葬儀は無事に終わり、ほっとしたのも束の間、また数日後に今度は先生のご家族から電話がありました。

「検査の結果、すでに残りの日を数えるほどの状態だと医師に言われました。本人も牧師ですから、なにかしら考えていることもあるだろうと思って、葬儀をどうするかと尋ねたら、そちらに頼むようにと言うので、予めお電話したのです」

私は葬儀士として努めて冷静に「わかりました。できる限りのことはさせていただきますね」と応えながら、内心はぼんやりと（先生、その「葬儀はどうするか」っていうのは、教会でやるのか、誰を呼ぶのか、説教や弔辞を頼みたい人はいないのか、遺骨はどうするのか、なんていうことを訊かれてるんであって、葬儀屋をどうするかなんて二の次じゃないですか…？）などと頓珍漢なことを考えていましたが、ふと我に返り（ああ人間、自分が受け入れがたい事態に直面すると、まったく的外れなことを考えて精神の安定を図るというのは、こういうことか…）と、妙に納得したものです。

数日後に先生のご家族、教会の他の先生や役員、説教予定者らが集まって事前に相談の場を設けるというので、それまでに課題を整理して、現実的なプランをいくつか考えておかなければなりません。あまりに急なことに誰もが混乱しているでしょう。けれども私まで狼狽えるわけにはいきません。「いろいろお世話になるけど」の「いろいろ」が、どこまでのことを思ってたのか、それは知る由もありません。それでも、なによりもご自身の葬儀について私を指名してくださったこと自体が、伺うことのできなかった戦友からの答えだったのだらうと、ここに至ってはそう信じるしかないのです。

そうして様々な備えをし、とうとうその日を迎え…今、前夜式が終わりました。他のスタッフに献花するよう促し、最後に私も先生の棺の前に立しました。

（先生、とりあえずここまで終わりましたよ。まあなんとかなってますよ。どうですか、それなりにご期待に添えてますか。「いや、悪いねぇ」って？ええ、そりゃあもうね、大変ですよ、本当に。

私も葬儀屋なりに自分の葬儀のことを考える時もあります。もしかしたらいつかひょんなことで、私の葬儀の司式をしてくださるのが先生かもしれないなどと思ったこともありました。けれど逆は考えてなかったですね。年の順からすれば考えても良さそうなものなのに、勝手なものです。でも、どういっても結局は私のほうが残っちゃったんだから仕方ありませんね。

周りの皆もそれぞれ、辛いながらも自分の役割を頑張ってますよ。ご家族や葬儀委員長はまだ向こうで挨拶してますね。なんせ先生、人気者でしたからね。やっぱり参列者も多かったですし話も尽きないでしょう。先生が気にかけてらっしゃった担任の先生も立派に司式なさってましたね。教会員さんの葬儀も大丈夫そうでしたよ。今後大変でしょうから頑張りすぎないかは心配ですけど、私も自分の職能の限りは、これからも先生や教会の皆さんをお支えしますから。

ですからね、どうかご心配なく。…あとは、やっておきますから、今はゆっくりと憩われてください）

そう、申し上げたのです。

振り返ってみると、先生と一緒に仕事をさせていただく中で最も多く申し上げた言葉が、この「あとは、やっておきますから」だったのではないかと思います。葬儀の打ち合わせの際、先生を交えて式典の概要や日時などを決めた後、ご自身の準備にお戻りいただくため、細かい内容の詰めや費用の打ち合わせについては「あとは、やっておきますから」。火葬場で火葬前式が終わった後、教会に戻られる先生に「あとは、やっておきますから」。葬儀が終わった後も、遺族のアフターフォローを「あとは、やっておきますから」。

そしてその度に先生は「じゃあよろしく願います」と微笑んで仰るのですが、特に打ち合わせの中で退出される際には、遺族に対してさらに一言「この方にはいつもお世話になってますから、この教会のこともよく心得てくださってますし、安心して相談なさってください」などと声を掛けてくださいました。これは大変に有り難いことでした。

教職と遺族、教職と葬儀士は何度も顔を合わせていても、遺族と葬儀士は初対面ということはい多いものです。親しい人を亡くして動揺しているところに、さらによく知らない相手に頼らなければならないのですから、遺族が強い不安を抱くのは当然のことです。だからこそ、葬儀士が「お任せください」といい、教職が「頼んだよ」という。教職と葬儀士の間に信頼関係があることを周囲にきちんと見せる。この僅かなことが、遺族の不安や緊張を和らげるために大きく役立ちますし、葬儀士もまたその信頼に応えようとより強く思うのです。

実のところ、遺族を安心させたいという教職の想いは似通っていても、時折表現が真逆になるケースもあります。初めて呼ばれた教会で、先生が遺族の前で「今から費用のこと打ち合わせするんでしょう、私も同席させてもらうからね。要る要らないは私からも言うから、とにかく余計なものは売らないように」などと仰ったこともありました。それを聞いて「ああ、この先生は遺族に重い負担がかからないように心配なさってるんだな、教会員想いの良い先生だな」などと思う葬儀士はずいぶん変わり者でしょう。大抵はきっと「なんだいきなり、人を詐欺師か泥棒かのように言って。まったく失礼な人だな」と思っても致し方ありませんし、遺族も「やっぱり葬儀屋は信用ならないんだ、吹っ掛けられるんじゃないだろうか」などと思ってしまい不安が尽きませんね。自分が直接知らない相手が信頼できるかどうかは、間接的に知っていそうな人の、その相手に対する態度で推し量るとい

うのは自然なことです。

恐らくはこの先生も過去にあまり質の良くない葬儀社に当たったことがあるのでしょう。葬儀業界にも確かに一部にはとても良心的とはいえない者はおりますし、同じ業界人としても申し訳ないところです。ただそれは理解できるにしても、多くの真面目に頑張っている葬儀士からすればこう言いたいはずですよ。「先生ご自身がそんなに心配なら、事が起る前に予め呼んでくださいよ。一通り商品を説明して、費用はこれぐらいの範囲になりますよ、ってお話ししましたのに」と。その段で「これはこの教会には要りません」と仰るなら「じゃあこちらで施行する際には省いておきますね」で済むことです。相手を知らないなら知らないなりに、先にきちんと話し合っさえすれば、教職自身も安心ですし、それに伴って遺族も安心できるのです。

また私たちがキリスト教専門葬儀社だと知って、しばしば先生方からはこういった声をかけられます。

「あなた方のように教会をよく判っている葬儀社があるのは助かりますね。一般の葬儀社だと、一から十まで傍について指導する必要があって大変ですから」

これはもちろん、親しみを込めて専門葬儀社としての私たちの働きを高く評価してくださっているのですし、実際にご苦労なさった先生方の本音でもあるでしょう。それはとてもありがたいことです。けれども敢えてここで申し上げるなら、実は私はこう聞くたびに少し悲しいのです。なぜならその数だけ、信頼関係を築ききれなかった葬儀社があった。その数だけ、関係者に不満の残る葬儀があった。そう思えることが残念でならないからです。

しかしあるとき、キリスト教専門葬儀社のない地域からこちらに来られたある先生がこう仰ったことがありました。

「あのあたりにはもちろんキリスト教の専門葬儀社なんてなかったけれど、教会でお世話になっていた葬儀社の人はよく私たちの思いを聞いて、頑張っているいろいろと考えてくれたよ」

私はこう聞いてとても安心したのです。ああ、この教会は大丈夫だ。信頼できる良い助け手と巡り会えたんだな、と。

ある人の葬送を行うとき、その葬送に関わる人たちは皆全体でひとつの共同体であると私は考えています。関わる人たちは皆それぞれの思いや考え、信仰を持っていますが、その人を葬るという点においてはその意思は合致していなければなりません。そして現在の日本社会においては葬儀業も専門化しており、ほとんどの場合その実務の多くの部分について葬儀社の関わりを必要とします。そうであるならば、この葬送に関わる共同体には、遺族や教職、参列者のみならず葬儀社をも含めなければならないことは必然です。

葬儀士が教会のことをよく判らないのであれば、そのことを残念がるよりも、まだできることがあります。彼らを教会に、そして礼拝に招くことです。キリスト教葬儀の中核が礼拝であるなら、実際の主日の礼拝に参加し体験してもらって礼典の内容や雰囲気を理解してもらおう。そしてそこに葬儀の要素を加えていくのに実務上の課題も踏まえてどのようにするのがよいのか、それを葬儀士と一緒に考えていくべきなのです。

思い切って近くの複数の葬儀社に声をかけてみるのも良いかもしれません。正直に「いざという時に私たちを助けてくれる方を探していくつかの葬儀社を当たっているのですが、あなた方もそこに加わってくださいませんか」と仰ってよいでしょう。これでノーという葬儀社であれば、確かにその先も信頼関係を築くのは難しいかもしれません。けれども「お力になれることがあるかは分かりませんが、とりあえずお話だけでも伺いますよ」と言ってくれる葬儀社がひとつでもあれば、そこが始まりとなるでしょう。

以前、私どもの社で働いてくれていた神学生が牧会に出る際に、私は彼にこう言いました。

「向こうに行ったら、忙しいだろうけれどできるだけ早く役員さんや教会歴の長い人にこれまでの葬儀の様子を訊いたり、写真や式次第などもあれば見せてもらいなさい。過去に世話になった葬儀社も訊いて君の方から挨拶に行きなさい。それが専門葬儀社だろうと一般葬儀社だろうと同じことだ。パンフレットをもらったり商品の説明を訊くのももちろんだけれど『この地域の風習や火葬場のルールを知らないの、また必要なときには教えてください』と頭を下げておきなさい。知らない土地、急な葬儀で右往左往する前に、いざ

という時に君を助けてくれる信頼できる人を一人でも多く見つけておきなさい。それが、  
延いては君だけでなく、教会員さんたちの豊かな教会生活を守ることに繋がるから」

わかりました、と出て行った彼も、先日久しぶりに近くの教会の説教奉仕に戻ってきて  
いたところに会いましたが、いつの間にかずいぶんと牧師らしく成長し赴任先でも立派に  
頑張っているようです。亡くなられたあの先生が彼のこともずいぶんと気にかけてくだ  
さっていましたが、これもひとつ、安心してくださっているのではないのでしょうか。

今、教会社会も葬儀業界も様々な課題に直面し、非常に舵取りの難しい時代に差し掛かっ  
ていますが、だからこそ、教職と葬儀士、両方の想いに触れている彼のような人物が、今  
後も教会社会と葬儀業界の関係がより良く発展していくための架け橋になってくれたら、  
と願っています。

いかがでしたでしょうか。皆さんは葬儀社のオフィスに入ったことがあるでしょうか。  
葬儀士を自分たちの教会の礼拝に誘われたことがあるでしょうか。彼らに対し、私たちが  
知ってほしい、そしてまた私たちもあなた方を知りたい、と思われたことがあるでしょ  
うか。自分自身や大切な家族のもしもの時、この人やこの会社に葬儀を頼もう、と思える相  
手がいるでしょうか。「あとは、やっておきますから」と言ってくれて、皆さんからも「よ  
ろしく願いますね」と、安心して任せられる助け手を見つけられているでしょうか。

皆さんが教会生活の良きパートナーの一人として、信頼できる葬儀士と巡り会えるよう  
心よりお祈りしております。

〔質疑応答Ⅰ〕

問：コロナ禍の中、病院に入院された方のお見舞いにも行くことが出来ず天に召されても親族だけでの「家族葬」ということが増えていて心苦しく感じています。とりわけ「コロナ陽性」で天に召されると、納体袋に入れられて触れることが出来ない、火葬場に直行されるなど特別の対応がとられるようです。自治体によっても対応は異なるのかもしれませんが、葬儀業界の実態としてそのような場合にはどのような対応が可能なのか、現状と課題などを伺わせていただけるとありがたいです。

答：ご質問にあるコロナ陽性で亡くなられた方の取り扱いは2020年に厚生労働省などが定めたガイドラインを元にした措置です。病院で亡くなるとそのまま病院のスタッフが納体袋に納め、さらに棺に納めてから搬送事業者等に引き渡すというやり方で、陽性者に触れる人を最少かつ感染防御の知識や設備のある医療関係者たちに限り、さらなる感染を防ぐという趣旨でありました。しかし当初は未知の感染症に対する例外的な措置として致し方無し、という見方もあったものの、やはり遺族近親者からすればお別れも十分にできないのは辛いことですから、数が増えるにつれ世間の不満も大きくなっていきました。そこでとうとうこの年明けに厚生労働省もガイドラインを改定しまして、現在ではご遺体の鼻や肛門などに詰め物をした上で全身を清拭するなど適切な感染対策が行われている場合には、その後は納体袋なども必要ではなく、また遺族の希望に応じて通夜葬儀もしていただき、というふうに指針が変わっています。火葬場での取り扱いについても現在はまだ二類相当感染症であるために24時間以内の火葬は可能ですけれども、これまでのようにコロナ専用の入場時間を設けて他の遺族と接触を減らすような措置が取られることも無くなり、大凡の火葬場で普通の方と同じような取り扱いになっています。実際に私もこの改定の直後にコロナで亡くなられた方を扱っていますが、使い捨ての上着や手袋などの防御策は取りましたけれど、その他は通常のように病院でベッドからストレッチャーに移し替えるところから私たちが行いましたし、出棺前には普通に棺を開けてお花を入れてお別れをしました。その際にご遺族もけっこう遠慮なく故人のお顔を触ったりしていたのですが、その後の体調不良等も伺っておりません。

ただし、このガイドラインでも解剖後や体液の漏出等がある遺体については感染のリスクが高いために引き続き納体袋の使用を推奨するとなっておりますし、この通りにしても感染しないことが保証されているわけではありません。あくまでもガイドラインであって強制力もありませんから、実際にどのように取り扱うかは最終的にそれぞれの事業者の判断に委ねられることとなります。先ほどの例ではいわゆる葬式はせず、棺はご自宅ではな

く私どもの事務所で預かりしたのですが、私も念のために他のスタッフには出勤するな、私と搬送のドライバーと2人だけでやるから、と言って関わる人員を最小限にしていますし、もしかしたらより強い危機感を持ってこれまでと同様に納体袋を使わないと引き受けないなどと決めている事業者があったとしても責められるものではありません。ですからこういう事こそ、日頃教会でお願いしている葬儀社があれば、いざというときにはどのようにできるかということ事前に協議しておくほうが良いですし、それが間に合わないなら病院から搬送する事業者を選ぶ段で相手に、納体袋を使わず普通に葬儀をしたいけれど引き受けてくれますか、と確認しておくべきです。

しかし課題はそれだけではありません。ガイドラインが変わり、引き受けてくれる事業者があったとしても、さあそもそも教会でコロナ陽性者の葬儀をすることを他の教会員さんが受け入れられるか、ということのほうがもっと大きな問題だからです。単に「気になる人は参列を控えてください」で済めばいいですけど、そもそも「コロナ陽性者の遺体を教会に入れること自体が不安だ」とか「教職が感染したらどうするんだ」などという人がいたときには揉める可能性もあります。またご質問にも「家族葬が増えて」とあるように、たとえ亡くなった方が陽性者であってもなくても、このコロナ禍中においては遺族の側が過分に気を遣って、教会で人の集まる葬儀をするのは申し訳ないと遠慮するようなケースも多いわけです。

ですから難しく思えるかもしれませんが、段階的に、まずはそれぞれ教会の皆さんでこのコロナ禍中における自分たちの教会の葬儀、また特にコロナ陽性者の葬儀に対してどう臨むかということをしちゃんと話し合い、その結果教会員も参列して葬儀を行いたいという要望が強ければ、それに沿って引き受けてくれる事業者を探し、そしていざという時には遺族に「このように体制が整っているから安心して教会で葬儀してください」と伝えられるように準備しておく必要があるわけです。ほとんどの教会ではまだ、教会員に参列してくださいともしないでくださいとも言えず「様子を見ながらそれぞれに判断してください」といった曖昧な姿勢になっていると思いますけれど、その場合には遺族の遠慮が先行していわゆる家族葬になるのも仕方ありません。教会としてそうでないほうが良いと思うのであれば、はっきりと「ご希望の方は参列してください、ただし自宅を出る前に必ず検温し、7度5分以上の発熱がある方、咳などの不調のある方、家族に同様の症状がある方は参列しないでください」などと分かりやすい基準を決めておくべきですし、それでも感染者が出た場合にも、葬儀を行うことを決定した人たちを責めないという合意も大切ですね。むしろそこをどうしても合意できないのであれば、その教会ではまだ当面「一般参列者のある葬儀はしない」という選択がされるほうがより平和的だといえます。

## [質疑応答Ⅱ]

問：家族葬の形も良い部分があるが、伝道の方が失われているように感じている。前夜式も少なくなっているように感じている。形式に変化が生じているか？

答：前半の葬儀の様態と伝道の評価については私の職分上ここでは直ちには触れませんが、後半の前夜式が減少しているかというご質問について、少し手元にあるデータをご紹介します。2020年から22年まで3年間、つまりはこのコロナ禍中に弊社で請け負ったプロテスタント様式での葬儀における前夜式の様態を見ますと、一般参列者を含め葬式に準じた形で行ったものが約14%、近親者のみで簡略に行われたり納棺式に置き換えたりする形で行ったものが約10%、特段に式典を持たなかったものが約75%などとなっております。これはやはりコロナ禍中においては感染予防のために多数の人が一堂に会する機会を減らそうという意識の表れであり、そのためにコロナ禍によって葬儀の様態が大きく変わったと言われることが多いのですが、実は葬儀業界内では、特にこの前夜式の持ち方の変化についてはあまり大きな驚きを持っては受け止められませんでした。近代日本の葬儀の様態は都市部でその変化が早めに現れ、そこから徐々に郊外に波及していくのですが、都市部において前夜式が行われることがほぼ当然のように思われていたのはせいぜい1990年代頃までで、コロナ禍直前、2017年から19年までの同じく3年間を同条件で見ますと、準葬儀約40%、簡略約15%、式典なしが約45%と、すでにそこその割合で前夜式は省略されていました。感覚的に表現すると、1990年代には「まあ普通は前夜式するよね」と言っていたのが、2000年代には「事情によっては省略されることもあるよね」、さらに2010年代には「家庭によってやったりやらなかったりですよ」といった具合ですね。もちろんこれは都市部と郊外の差のみならず同じ地域でも教会や教職、故人や遺族の属性によっても差が大きく、例えば手元にあるデータでは2016年から18年のある教会での前夜式は準葬儀約68%、簡略約25%と9割以上で何らかの式典を伴っていた反面、別のある教会では同期間に前夜式を行わなかったケースが8割などとなっており、日本のキリスト教葬儀は、という大きな括りで一概には言いづらいのですが、それでも全体的に見れば前夜式縮小の傾向は長らくあって、このコロナ禍でそれが加速した、決定的になった、というのが我々業界人の見方でした。

ただ、大事なのはここからです。先ほど一般の参列者を招いて前夜式を当然のように行っていたのが90年代頃までだと申しましたが、これをもって、日本におけるプロテスタント教会160年来の葬儀の伝統的様式がこの20年ほどで失われてしまった、と考えるのは早計です。前夜式に一般参列者が加わり、式場が教会や葬儀会館になり、内容が葬式に準ずるよ

うになっていったのは、実のところ高度経済成長期半ばの1960年代以降であって、拡大基調にあったのはわずか30年そこそこなのです。この間、社会人として葬儀を経験している世代が今は50代から70代ぐらいですから、現在活躍している教職の中でも層が厚く、故にこの頃の前夜式がスタンダードだとも思われがちですが、それ以前の前夜式は概ね自宅等において家族近親者で祈祷会のように営まれることが多かったのでしょう。これは世間に多かった仏教葬儀等でも同様でして、それ以前の通夜は自宅等において近親者が故人の傍で夜通し過ごしその死を確認していくという時間だったものが、参列者が増え、式場に移動し、そのため時間を区切って式典にする必要に迫られたため、現在で通夜というところの式典が一般化するまでは、それを本来の通夜と識別するために半通夜や通夜式などとも呼んでおりました。

この様態の変化は例えば日本基督教団の口語式文、お使いの先生もいらっしゃると思いますが、ここからも読み取ることができます。口語式文の初版は1959年、つまり前夜式が葬式化していく前です。この中では葬儀諸式として納棺式、前夜式、出棺式、葬式、火葬前式と展開されます。病院で亡くなっても自宅に寄らず、教会に直行することも増えた現在からすると、なぜ出棺式が前夜式と葬式の間にあるのか、骨葬地域でもなければ出棺は葬式の後ではないかと思われるかもしれませんが、この式文における出棺式は自宅で納棺式、前夜式を行った後、葬式場となる教会等へ向けて出棺するための式なのです。2006年初版の新しい式文、こちらでも出棺式は自宅から式場へ送り出す際の式、とされていますが、位置的には時代背景を受けて一応納棺式と前夜式の間に移されています。むしろ前夜式の項に「近年、一部において、前夜式の形式や内容が、葬式に似たものとなりつつある傾向がある」と書かれているほうが時代からするとやや驚きで、もう一世代上の方が書かれたんだな、と思ったぐらいです。この式文や諸式の構成については中道先生がご専門と伺っておりますからこれぐらいにしておきますが、要するに葬儀の様態は時代の社会事情によって常に変化し続けているのであって、殊更に今、過去に無い変化が起こっているということではないのです。

現在の前夜式の縮小傾向はコロナ禍の影響を別として、参列者の範囲縮小、特に亡くなる方の高齢化に伴い夜でないと参列しにくい現役世代の参列者が減少していることに加え、遺族も高齢化していますから、前夜式葬式と二日分の気力体力に不安がある、そして参列する人も大変だろうという遺族側の遠慮なども相まってのことです。つまりはそれぞれの葬儀の事情によって、都度どのような選択をするのが一番良いのかを考えるべきで、現役の人が亡くなれば当然に一般参列者を含めた前夜式をした方が関係者は参列しやすいでしょうし、前夜式葬式と参列者が同じなのにどうしても前夜式を葬式に準ずる形です

必要もないでしょう。それは決して手を抜いているのではなく、仮に伝道のを機会を重視するとしてもそれは葬式に注力して、前夜はより親密に、遺族の慰めとなる時間を過ごしつ、翌日に無理が祟らないようにしよう、などという考え方もあるわけです。

### [質疑応答Ⅲ]

問：自死の方の葬儀について、講師のご経験を事情が許される範囲で聞きたいです。

長く葬儀士をしていると自死の方の葬儀をすることも確かにありますが、センシティブな内容でもありますし、ご質問の要旨がはっきりしないとやはりお答えしづらいものです。何かしら具体的なお悩みがあるようでしたら、また近くにお越しの際にでも事務所にお寄りくださればお話ししましょう。

しかしそれはそれとして、このご質問の趣旨が、一般論として自死の方の葬儀をするに当たって、遺族近親者への声かけや態度、説教の内容などについてどのようなことに気を遣うことが適切か、というようなことであれば、何よりもまずお願いしておきたいことは、実際の葬儀に当たっては、自死というカテゴリーに注目するのではなく、必ずそのひとりひとりの死者、その遺族近親者自体に注目してほしい、ということです。自死に限らず、病気、老衰、事故、殺人、災害、戦争などその分類に関わりなく、ある人の死を取り巻く環境は必ずその人に固有のものです。一口で自死と言っても、死の状況、そこに至る経緯や動機、周囲との関係性、遺族の悲嘆反応など全てが異なるのです。

例えば自死遺族のケアに対するありがちな解説として「遺族は自死を思い止まらせることができなかったという強い自責の念に苛まれるものだ」などと言われることは多いでしょう。確かに傾向としてならば、そういう状況は少なくありません。けれどもある自死者、この人は生前様々な不運や苦労を重ね、周囲から見ても如何ともし難いような痛みや辛さを抱えながら、それでも懸命に生きてきたのですけれど、とうとう最後には自死に至った、という人の葬儀がありましたが、その遺族が故人の傍らでポツリと「長い間辛かったろうなあ、やっと楽になったんやなあ」などと言ったこともあったのです。そんな時にテンプレ的に「どうかご自分を責めないで！」などと言っても、これは全く噛み合っていないわけですね。また逆に、ごく一般的な病気であっても、その発見が遅れたような場合に、近親者が「どうしてあの時不調に気付いてやれなかったのか」とか「本人が病院嫌いだったが、無理にでも連れて行くべきだった」などと強く自分を責めるようなケースだっていくらかもあるのです。

ですからまずは、相手がどのような状態にあるのか、それをよく観察することです。この亡くなった方はどのように生きてきたのか、周りの人たちは今どのように思っているのか、時間をかけて耳を傾けて聴き取ることです。東日本大震災以降に「傾聴」という言葉が盛んに取り上げられるようになりましたが、まさしくその作業が、個々の葬儀においてなにより重要になるでしょう。その人にとって適切な対応の答えは、その人の中にしか

いのです。

まあとはいえ、それはある程度の数の葬儀を見ているからそう言えるのかもしれませんが、不安なものは不安だ、時間にも限りがあって大変だ、という教職の思いも当然だと思います。ですからそういう時にこそ、教会の役員や葬儀社の助けも借りて、「ご遺族はどう思ってるんだろうか」「さっきこんなこと仰ってましたよ」「じゃあこうしてみようか」などとチームで当たることも大切でしょうね。また教会内あるいは近隣教会の教職や事業者などとも連携して、「葬儀があってしっかり準備したいから、この仕事とこの仕事代わってよ」とか「説教考えてるから平行して式次第作ってよ」などとお互い気軽に助力を求められるような環境が作れるのであれば、もっと教会葬儀は豊かになっていくことが期待できるかもしれませんね。

#### [質疑応答Ⅳ]

問：教会に関わりのない人、未信者の人が葬儀を希望されたとき、どのような対応をしますか。また、本人が生前に教会での葬儀を希望されましたが、遺族がそれを希望されなかった場合、牧師はどのような対応をすればよいですか。

答：このご質問は学生さんからだと伺っておりますので、自身が牧会に出たとき、ノンクリスチ안의葬儀を依頼されたら引き受けるべきだろうか、他の先生方はどのようにしているのだろうか、という趣旨でしょうか。ノンクリスチ안의葬儀をどの程度引き受けるかは、教会や教職によってかなり温度差があります。またなぜその人の葬儀をキリスト教で行いたいと希望するに至ったか、という動機によっても判断が変わってくることもあるでしょう。例えばその教会に出席し、求道中で受洗に至る前に亡くなった場合や、教会員の家族の葬儀をその教会員が主になって行うような場合には引き受けることも多いでしょうけれど、他にも特に本人の信仰は聞いたことがないけれど、昔ミッションスクールに通っていたから、強いて言えばキリスト教が最も馴染みがあると思う、などと相談されることもありますし、中には家から最も近い宗教施設が教会で、礼拝は行ったことないけどそれ以外で日頃から先生と近所付き合いがあったから、などということすらあります。また、そもそもノンクリスチ안의葬儀を依頼される頻度がどれほどかというのも、社会活動、例えば病院や老健、自立支援事業などをミッションとして行っている教会ではノンクリスチアンとの接触も多いために比例して高頻度になりますし、教会が開いているのは聖日だけで、教職も教会に住んでいないというような教会ではあまり無いでしょう。

教職がノンクリスチ안의葬儀を引き受けるべきか、ということは、これも私の職分を超えますから申しませんが、実際に引き受けなかった理由、というのをいくつか例示しますと、ひとつはもちろん信仰的な理由、キリスト教葬儀はクリスチアンのためのものだ、という主義を教職が強く持っているケース。次にノンクリスチ안의葬儀を引き受けた経験が乏しく、説教で語る内容や遺族とのコミュニケーションに自信が無い、というようなケース。また葬儀を引き受けた際に同時に式場として教会堂を貸すことも多いのですが、教会外の人に教会堂を使わせるのを教会員が嫌がる、あるいは教職には教会内部の仕事に専念してほしいから、外のことで…などと難色を示すケースもあります。逆に、ホスピスと併設されているような教会では、入院中にチャプレンと交流し葬儀もそのままお願いしたい、と希望する人も少なくありませんから、ノンクリスチアンであっても希望する人の葬儀を引き受けることは当たり前になります。さらに、家族もノンクリスチアンの場合などにはいきなり教会に相談に行くのも敷居が高く、葬儀社に相談して誰か引き受け

てくれる牧師を紹介してください、などということもあります。亡くなった人の自宅に近いからここ、などと簡単にはなかなか決められず、その葬儀社が頼みやすい教会や教職、というのも必然的に生じてくることになります。ご質問の文面からは、質問者さんがノンクリスチャンの葬儀をしたいのかしたくないのか、どこに不安を抱いているのかが判然としませんが、これも必要ならまた直接お話ししましょう。いずれにせよ、引き受けるに当たっては教会の承認を得る手続は必要でしょうし、可能ならば事が起こる前に、こういう基準であれば引き受ける、あるいは引き受けないと教会内で大凡の取り決めをしておくほうがスムーズでしょうね。

そして後半、例えば教会員の葬儀をその教会ですることを遺族が希望しなかった場合、ということですが、これもその状況に至った経緯はどうなのか、それによってもずいぶんと話が変わってきます。まずありがちなのは遺族の希望を訊く以前に、教会に亡くなったという連絡がなく、知らない間に葬儀が終わっていたというケースですが、これはまず本人が教会での葬儀を希望していること自体を遺族が認識していない、という消極的理由が多いでしょう。エンディングノートを書いても家族に伝えていなかったら意味が無い、とはよく言われることです。むしろ「ウチの宗教はこれだから、キリスト教でなんか葬儀しないぞ」などと遺族が言うなんていうことは、新興宗教などを除けばせいぜい昭和後期ぐらいまでの話で、平成以降は大凡「信仰心は家族で縛られるものではなく個々人の自由だろう」というのが日本社会のトレンドでしょう。まあこれがために教会内でも信仰の家庭内承継ができてないと問題になっているわけですが、少なくとも葬儀における宗教の選択という意味では、相当に本人の希望に沿ってということが多いわけです。それでもなおハッキリと「教会ではやりたくないんです」と遺族が言うとしたら、まあ大体それまでにいろいろ教会との関係が拗れてますから、それは日頃の牧会の中での課題であって、いざ葬儀の段になってからできることは残念ながらあんまりありませんね。ただ全然別の理由、例えば先ほどキリスト教系ホスピスの患者がそのままキリスト教葬儀を希望することがあると言ったように、逆に仏教系ホスピスにいるクリスチャンがせっかくだからここで最後までお世話になろう、などと希望するケースももちろんあるわけです。そのような場合には教会との関係が悪いわけではないのですから、相手の判断を尊重しつつも例えば「良かったら枕辺でお祈りだけでもさせていただけますか」とか、「お式には教会員も参列させてもらってよろしいでしょうか」「後日教会の有志で記念会をしますから、ご遺影を持ってお越しくださいませんか」などと教会側の希望を遺族に伝えるのは良いかもしれませんね。